

現役二年捕虜四年

熊本県 上羽 淳一郎

大正十一年一月生まれの私は、年ごろの青年期に達したとき、太平洋戦争にぶつかり、否応なく兵隊として戦いの渦中に投げ込まれたわけである。大正末期から昭和初期に生をうけた男子は、すべて兵隊として根こそぎ動員される運命の星の下にあったのである。

昭和六年の満州事変以来、硝煙の匂いと砲弾の炸裂する音は絶えることがなかった。昭和十四年、中学を卒業し、東京へ文字通りの遊学[？]をし、親元を離れての自由奔放な生活が祟り、たちまち健康を害し故郷へ連れ戻され、療養[？]専一の生活を余儀なくさせられていたとき、運命の真珠湾奇襲で大戦勃発、日本全国が緒戦の勝利に沸きに沸いたのも束の間、形勢不利になり徴兵検査にかかり、病氣療養中にもかかわらず第一乙種合格。十九年一月、満州独立守備隊、通称一三八部

隊に入隊を命じられたのである。

時は一月、奉天駅に夜中に到着、列車を降りてホームに立ったとき、その余りの寒さに跳び上がった。駅より一直線、兵舎まで行軍。西も東も分からぬまま営門をくぐった。

一月十五日、命令下達式。部隊長が壇上に立ち、皇居遥拝の後、初年兵全員に命令を下した。

この日から初年兵哀歌が始まった。到着した夜、温かいぜんざいでもてなしてくれた態度は一変し、「貴様たち初年兵に今日から独立守備隊魂を叩き込んでやる」と怒号し、拳^{こぶし}を構えていた。その形相はまさしく鬼瓦である。初年兵の起居動作すべてがビンタの対象にされた。半病人のような私はとても訓練にはついて行けない。駆け足、重量上げ、匍匐^{はくふく}前進すべてピリ、班長に蹴飛ばされ叩かれ、目の前が真っ暗になる。営内での動作も要領悪く、食事もうくに食えない初年兵生活が始まった。

古年兵たちは何かといえば「泣く子も黙る独立守備隊」と豪語し、あらゆる手を使って初年兵をいびりに

かかった。ここはまさしく地獄の一丁目である。くたくたになって点呼を受け、掃除が悪いと総ビンタを食らい、やっと寝台にもぐり込む。

消灯ラッパが鳴り響く。なんと悲しいメロデーだろううか。

「新兵さんは 可哀そうだね

また寝て泣くのかよ……」

弱兵の烙印を押され、大石橋の弱兵の教育隊に回され、そこで力も気力もなくし咯血した。軍医がレントゲンを見て眩いた。

「よくその体で来れたな……即入院だ」

海城陸軍病院に入院、病室満員のため廊下に寝かされ放置された。診察もないまま分院に送られ、やっと二人部屋に入れられた。そこには金筋一本星一つの伍長殿が寝ていた。ここで危うく一命を拾い、五月半ば奉天陸軍病院に転院になり、療養しながら原隊復帰を待つ。九月に入り退院と決まり、牡丹江陸軍病院、ジャムス陸軍病院と渡り歩き、松花江を下り富錦に着く。原隊は富錦の町よりさらに奥にあり、通称五頂山の麓

にあった。

原隊復帰の申告を済まし、薄暗いランプのついた班内に入り一人一つ立っていると、いきなり雷が落ちた。「こら……入院下番の初年兵、貴様どこまでタルンでいるか、ぶつ飛ばすぞ」と罵声が飛んできた。その日から私に対するシゴキが始まった。数日の間に顔は変形してしまった。

真冬になれば、五頂山は風が吹き荒れ、気温はぐんぐん下がり、天地すべてが凍りつく。九州育ちの私にはこれは地獄だ。山頂から見ると松花江は凍りついてキラ光っている。船も通わず、鳥も飛ばぬ陸の孤島になってしまふ。現役除隊を取り消された四年兵と応召の古年兵は、壕内で酒を食らい、ばくちに興じ、猥歌を歌い、初年兵は谷底から水を背負い、炊事用の水、風呂の水を確保しなければならなかった。

昭和二十年五月、突然移動命令が下った。松花江を上りジャムスより軍用列車で南下した。間島省延吉で下車。そこで転属になり、古賀龍太郎中将の配下の部隊に編入された。

にわかづくりの挺身斬込隊である。訓練一カ月後、師団長の査閲を受けた。

「諸子は我が師団の虎の子である、奮励努力せよ」の一言を残し去っていった。間もなく運命の八月九日を迎えたのである。

けたたましい非常呼集の叫びに跳び起き、ソ連軍の国境突破を知る。小銃弾六十発、手榴弾三発を渡され、夜半行軍開始、山の中に引きこもってしまった。機動力は零に等しい。歩兵はただ歩くのみである。後で分かったことだが、ソ連軍は戦車を先頭に、ジープ、トラック、馬車にうち乗り進撃してきた。ジープ、トラックはアメリカ製だが、その行動の速さに目を剥いた。歩兵操典にもない敵方の機動力に対する我が歩兵の装備は余りにも貧弱だった。

もう指揮系統はめちゃくちゃで、逃げの一手で、闇を幸いどこへ行くあてもなく、行軍の速度は自然に速くなった。明け方、部落に下りて来て終戦のうわさを聞いた。鉄道線に沿って長く伸び切った行軍に、突如

背後からソ連機が超低空で頭上を通過した。私たちは蜘蛛の子を散らすように田圃に散りはいつくばったが、なぜか撃ってこなかった。すでに戦闘行為は終わっていたのである。日本敗戦のうわさは真実だったのだ。

部隊は完全にソ連軍に囲まれ、抵抗する術もなく武装解除に従った。ソ連軍の接收部隊が来るまでの三日三晩、ありったけの酒を飲み、食えるだけのものを食い、「これで助かった」という実感が身体の中を駆けめぐった。

泣く子も黙ると豪語していた関東軍も、音を立てて崩れていった。武装解除を受け丸腰の姿で、背負えるだけの食糧を背負い、重い足取りで延吉の町に、警戒兵に前後を監視され、連行された。町には至るところに青天白日旗と赤旗が翻っていた。

邦人はすでに鉄条網の囲いの中に収容されていた。その前を通過して行く敗残の将兵の行列を無表情でボカンと見ているだけで、お互いに声も出ない。

現地の朝鮮人たちが腰に日本刀をぶち込んで往来を

闊歩し、満人の表情もガラリと変わっていた。すべてが十五日を境に、一瞬にして立場がひっくり返ったのである。練兵場に収容された私たちは、早速自活しなければならぬ。食糧の配給は一切なし、背負ってきた物を食いつないでゆかねばならぬ。雨露をしのぐべき住居も確保しなければならぬ。穴を掘り携帯天幕を張り、十人くらいのねぐらをつくった。夏の陽は容赦なく照りつけてくる。鉄条網の外には、満人が見世物を見るような気分で黒山のように集まってくる。

まず、水を確保しなければならない。一カ所しかない井戸に殺到し、延々と列をなし順番を待たねばならない。小一時間もかかって飯盒一杯の水をくんで運ぶと、痩せ衰えた軍馬がその水を飲ませてくれと鼻をすり寄せてくる。明日はどうなるかだれにも分からない。毎日続々と捕虜になった兵士が収容され、その数は瞬く間に一万を超えた。各人が毎度の食事の調達に頭を痛めていた。窮すれば通ずるか、ソ連軍の歩哨が警戒している倉庫に近づき、腕時計をちらつかせて、身振り手振りで米との交換を持ちかける。彼らは腕時計に

は目がない。話はすぐまとまり、米一俵持ち出し成功する。それからは各自の目ぼしい品物を出し合い、その日の相場を見て物々交換に精を出した。

ソ連軍は毎日毎日、満州各地から略奪した物資、食糧はもちろんのこと、女性の赤い腰巻きまでトラック（USA製）に満載し、昼夜を問わず砂塵を上げて国境への道を走り続けている。我々には一粒の米もくれず、一束の野菜も与えず、略奪に狂奔していた。

戦勝記念の祝賀だろうか、夜空に実弾をブツ飛ばし、ウオッカを痛飲し、歌い、踊り狂っているのだろうか。両国の花火を思わせる火の華がパツと咲いては消えていった。

眠れないまま、時折風に乗って聞こえてくる歌声に耳を澄ませて聞き入った。私たちは故郷を思い、父、母、妻、子供、恋人の安否を気づかい、一刻も早く帰りたい一心で一日一日を凌いでいた。

体の調子もがたがた、ビタミンCの不足で歯茎が浮き上がらせ、血が滲み出るようになった。青物欲しさ

は極限に達し、頭が変になりそう。収容所に生えていたペンペン草は一万人の人間によつてむしり取られ、食べられ、一草も残るところがなかった。

張りめぐらされている鉄条網の外には、季節の野菜類がみずみずしい姿を見せている。思わず鉄条網の近くまでにじり寄ると、警備兵の「ストイ」とまれ）の怒声が飛んでくる。止まらなければ直ちに威嚇射撃に遭う。もう日本人の生殺与奪の権は彼らの掌中に握られていた。

「東京ダモイ」の彼らの言葉を信じ、じいっとその日の来るのを待つ、我慢の一手しかなかった。連日、略奪した物資を満載したトラックが走り、各地から徒歩でたどり着いた日本兵が毎日続々と収容所の門をくぐって来た。

赤い夕陽を眺めながら、軍歌「戦友」を口ずさむ。

ここはお国を何百里 離れて遠き満州の

赤い夕日に照らされて 友は野末の石の下

今日も夕陽が地平線の彼方に沈んでゆく……。不覚に

も涙が頬を伝って落ちてくる。

十月になった。朝晩の風は冷たく肌を刺す。もう間もなく冬だ。冬將軍の足音がだんだん近づいてくる。

何か不吉な予感がする。「東京ダモイ」のうわさが話題の中心になるが、戦後の世界情勢はつんば枝敷に置かれていたので全くわからない。

今日一日をどうして生き抜くか、明日の我が身はどうなるか、口には出さないが思いは皆同じだったと思う。原隊を離れ同年兵とも別れ別れになり、臨時編成の捕虜部隊なので、隣に寝ているのがだれであるか、何を語り、何を聞き、何をしたか記憶にない。私は入院下番の弱兵として原隊では陰惨な古年兵のいじめに遭いピンタに明け暮れていただけに、終戦でやっとピンタを逃れることができたが、それに代わる捕虜生活を余儀なくされ、それが奴隷の生活であることがまだこの時点では実感として分からなかった。

「復員」という耳なれない言葉に胸躍らせ、明日にでも日本へ出発できるものと信じ切っていたが、もし

かしたらシベリア行きの疑念も拭い去ることができず、連日迷いに迷っていた。もう吹く風は冷たい。秋は短く、冬は目の前まで来ている。

十月の半ばごろ、千人単位にまとめられ「東京ダモイ」と信じ切って延吉の収容所を出た。約十日間の行軍の始まりである。夜明けから日没まで歩きに歩く。

この行軍の苦しさは、比島戦線で米・比軍の捕虜をマニラまで徒歩移動させた悪名高い「死の行進」にも匹敵するものだった。食物の支給がないため、背囊に詰まるだけ詰め込んだ米と乾パンで食いつなぎ、畑の作物をもぎ取り、生ニンニクをかじりながら、ただひたすらに歩いた。

行進の跡には何も残っていない。畑の作物はイナゴの大群に襲撃されたように荒らされ、その被害の範囲が横に広がっていった。落伍は死を意味する。

ソ連兵はジープや馬に乗り監視をし、逃亡を警戒している。食事ときにはスूप運搬車が来て、温かいスूपに黒パン、バターをたっぷりつけて、これ見よがしに食ってみせる。勝者と敗者、悔しいけれど生唾を

飲み込み見ているだけで、ソ連の若い兵たちは得意そうに食っている。悔しかったら戦争に勝てと言わんばかりの態度である。略奪した物資を満載したトラックが黄塵を巻き上げて通り抜ける。

気が遠くなるような一本道を、三重にできた大福餅のような足裏の豆を踏みつけ、踏み潰し歩く。これは地獄の針の山だ。野営地が決まると各自、夕飯と明日一日分の飯を炊き、死んだように眠り込んだ。夜露がおり寒い。両手両足を縮め、人肌で暖め合いながら眠る。

やっと鉄道の地点にたどり着き、これからは貨車に詰め込まれて、行き先不明の旅に出るわけだ。もう日本に帰ることなど諦めねばなるまい。覚悟を決めた。雨露を凌ぐため、丘の中腹に穴を掘り、屋根がわりに携帯天幕をかぶせる。見上ぐれば満天の星空に北斗七星が目につく。子供のころ親しんだ北斗七星をこんな所で見ようとは……

汚物にまみれた溜まり水で炊事・洗濯をするため、たちまち猛烈な下痢症状に襲われ、絶望的な気分にな

り、身も心もずたずたになる。下痢をとめなければ死につながるので、消し炭をがぶ飲みし、やっと下痢をとめる。

有蓋貨車に詰め込まれ、ガチャンと扉が閉められ動き出した。東に行くか西に行くか、牛馬並みに詰め込まれた私たちには分からない。隙間から吹き込む風はやけに冷たい。わずかに破れた隙間から見る風景は、まさしく荒涼たるシベリアだった。

汽車は時折、名も知らぬ寒駅にとまる。扉があけられ、水と少量の黒パンが差し入れられた。だが、生理的現象の始末には困った。もう大便が我慢できない。線路から離れることは許されないの、せっぱ詰まり、思い切つて衆人監視の中で尻をまくり用を足す。驚いたことに、周囲のソ連人たちは無表情に眺めている。羞恥心など、もうとつくになくしていた。もう動物に近い感覚でなければ生きてゆけない。敗戦国の悲哀をしみじみ感じた。

第一地区（ムリー）にて鉄道作業に駆り立てられた。

それはバラス下ろしから始まり、枕木を敷き、レールを担ぎおろし、犬釘を打ち込み、線路の歪みを直す。すべて未経験の仕事で、血の滲むような苦勞の連続である。いつか見たアメリカ映画の西部劇を髣髴させる場面だ。常時空腹の身では、でかい枕木を担ぐのがやつと、犬釘を打ち込む力などない。へたり込んでいるとソ連人の女囚が寄つてきて、「ヤポンスキー・スマトリ」（見ていなよ）とハンマーを取り上げ犬釘を打ち込んでみせる。

ソ連側の男囚、女囚の収容所に日本人の捕虜収容所があるので、朝夕は仕事場に行く道はラッシュアワーになり、ごった返す。彼らが声をかけてくる。「ヤポンスキーお早う、ご機嫌いかが」と。「ハラショー」と返事をする。決して「ハラショー」ではないが、これも社交辞令だ。

食糧も満足に与えず、ノルマ完遂を強要される捕虜の身は奴隷扱いである。一日の仕事を終え、ラーゲル（収容所）に帰り、夕飯にありつく。黒パンに塩味のスープ、鰯の塩漬けだけではとても身体がもたない。

寝て見る夢は食物の夢ばかりで、情けなくて眠れない。空腹で水ばかり飲んでいたので、裸になると、地獄極楽の飢餓地獄の絵そっくりで、下腹部が異常に膨れ肋骨が浮き出ている。私はここで夜盲症に悩まされた。

ムリー地区では私は十カ所ほどの収容所を転々と渡り歩いている。そのたびに仕事が変わってゆく。すべて未経験の仕事ばかりである。鉄道工事、保線工事、農場での馬鈴薯の植え付け、町の清掃、どぶ浚い、大工、左官、屋根葺き、兵舎の掃除、伐採と、見様見真似でやるので能率が上がるはずがない。ノルマの達成などできるはずがない。作業成績は芳しくなく給与は最低なので、体力は落ちる一方で、一日を暮らすのがやっとの状態だった。

ただ一つの救いは月一回の身体検査である。全員すっ裸になり、ソ連軍の女医の前に並び、一人一人女医の診察を受ける。下腹部の毛はきれいに剃り上げてある。発疹チフスを媒介する毛ジラミの発生を防ぐためだ。月一回、必ず剃り上げねばならない。

女医は頭から足の爪先まで見下ろし、肩の肉をつま

み、尻の肉を引っ張る。ただそれだけで等級がつけられる。まるで馬並みである。一級、二級、三級と四級に分けられ、三級は軽作業で、四級（オカ）に認定されると一切の作業を免除され、休養のため別の収容所に移され二カ月ほど休養するのである。この制度があるために救われたことは事実である。もしこの制度なかりせば、犠牲者の数は発表された六万の数倍に達していたかもしれない。

オカ収容所に移動するため、真冬、凍りついた川の上を夜通し歩いたことがある。靴は破れ、大切に持っていた地下足袋に履き換え、必死の思いで歩いた。空を仰げば星が降るように輝いている。零下三〇度に近い夜の空気は痛い。休憩すれば冷水を浴びたような寒気がする。暖をとるためにはただ歩くしかない。冬になると今でも身体のだこかにあのときの痛みを感じる。

収容所に入ってまず驚いたことは、食事の量の少なさである。これでは明日の命が保証できないと悲観せざるを得なかった。便所に囲いが無いのにも啞然とし

た。とても常識では考えられない。当分の間、明るいうちには便所に行けなかった。丸見えである。部屋に入って丸太を組んだ二段ベッドに寝るのだが、たちまち、蚤、シラミ、南京虫の襲撃に遭い、眠るどころではない。南京虫などは天井から顔に降ってきた。暗い中で手探りで潰しにかかるが、昼間の疲れでいつの間にか寝てしまっている。これが毎晩繰り返される。

昼間仕事の合間、秋の日差しを浴びながら、シャツの縫い目にずらりと並んでいる血を吸ったシラミを一匹一匹潰してゆく。その光景は、いつか動物園で見た猿そっくりだった。毎日のことだが、パンの分配には神経をすり減らすように気を使った。一食三百グラムの黒パンを十人単位で三キログラム受け取り、十個に切り分けるのであるが、当番のパンを切る手元を二十の眼が睨んでいる。物差しを作り、さらに公平を期するため天秤を作り、外側の固いところをどうするかで頭を痛め、ジャンケンでは決まらず、くじ引きで決めやっと手に入れる。

三百グラムの黒パンをゆっくりゆっくり噛みしめて

飲み下す。馬の餌にする脱穀していないコウリヤンの塩味のスープをすすする。肉片はなく骨が入っている。骨を捨てるのはもったいない。ペチカで焼いて食べる。

部屋じゅう骨を焼く煙がもうもうと立ちこめ火葬場のような異臭がしていたが、気にする者は一人もない。ランプもなく真つ暗やみの中での食事だから、何が入っているか分からない。天井から南京虫が食器に落ち、私はそれを知らずに食ってしまった。口中に異様な臭気が満ち満ちたが、口に入れた物を吐き出すことはできなかった。そのまま目をつぶって一気に飲み込んだ。昭和二十三年、雪解けを待つて、オカ収容所から貨車に乗り移動した。行き先は分からない。シベリアは広い、行けども行けども草原である。単調な景色の中に家を見つけてはととする。名もなき駅に止まると、村人が珍しそうに寄って来る。物々交換を迫って来るのだが、もう交換する物を持っていない。

第五地区（ホルモリン）二一七収容所にやって来たときは初夏だったと思う。ここには電灯が灯っていた。食堂があり、セルフサービスで食券を持ってゆけば食

べさせてくれる。先住者の顔も明るい。そこに私は文明を感じた。私はここに二年間いたことになる。

その間、いろいろなことを体験した。学生時代の病気がぶり返し咯血し、その上、左手中指の指疱瘡まであり、死の恐怖にさいなまれた。収容所のソ連軍の女医の適切な処置により救われた。

民主運動が日増しに盛んになり歌声運動により労働歌が盛んに歌われ、日本新聞によって思想改造教育が活発になってきた。

軍隊の階級制度は崩れ、選挙により民主委員が選ばれ、その指導により自主的に運営されていた。その後には、ソ連軍の政治部員の強力な後押しがあることは言うまでもない。

各収容所で人民裁判が盛んに行われていた、いわゆる吊し上げである。前歴を徹底的に調査し、あるいは密告により、元憲兵、警察、高級官僚が槍玉にあげられ大衆の前に引き出され、罵声と怒号の中で制裁され村八分に遭う。暴力こそ振るわないが、暴力に勝る復讐だった。異状な環境でのこの行為には救いがなかつ

た。

ときどき巡回映画会もあり、このときばかりは我を忘れてスクリーンに見入った。ロシア語だからせりふは理解できないが、じいっと見てみると何となくそのストーリーは分かるような気がする。もちろんソ連の職員、家族も一緒に見て、笑ったり涙ぐんだりしている。

戦後のトゲトゲしい敵対行為はいつの間にか影をひそめ、勝者も敗者もなく、同じ人間として接してゆくようになっていた。彼らも独ソ戦の犠牲者であり、ドイツ軍の捕虜体験者である。軍人以外の者でも、些細な理由をつけられ囚人としてシベリアへ強制連行されて来た人たちである。第一地区では男も女も手の甲に番号の刺青をしている人を多く見た。不思議に思い、これは何かと聞いてみた。「囚人の印だ」と答えてくれた。彼らは言う。「ヤポンよ、お前たちはいつかは東京にダモイがある、おれたちにはダモイはない」と。現役二年捕虜四年、都合六年間、前の二年はビンタで、後の四年は酷寒のシベリアで強制労働に明け暮

れた青春の日々だった。

私はここで何を知り、何を見たのだろうか。人間の強さと弱さと脆さを痛いほど自らの身体で経験した。命の尊厳と戦争の残酷と悲惨さを。

人類は有史以来、闘争の連続であり、今でも世界のどこかで硝煙の匂いがし、血が流されている。

昭和二十四年十一月一日、信濃丸で祖国の土を踏んだ。ナホトカを出るときにはもう雪が降っていた。雪から逃げるようにして信濃丸は港外に出た。同行していたソ連軍の将校たちもボートに乗り移り引き返した。甲板では解放された喜びにウォーツという喚声がこだました。船は一路、日本を目がけて嵐の日本海を突き進んだ。

風の舞鶴港を船は滑るように進んで行く。甲板は鈴なりの人ばかりで、無言で、墨絵のように薄く黒ずんで見える。遥かなる祖国の山々を見つめていた。

「国破れて山河あり」、帰還者の胸中はこの一語に尽きたと思う。

【執筆者の紹介】

大正十一年一月二日 熊本県山鹿町(現、市)に生まる

昭和九年四月 福岡県立三池中学校入学

昭和十四年三月 同校卒業

四月 中央大学専門部法科入学

昭和十六年 病氣療養の為中退

昭和十八年 徴兵検査、病氣療養中にもかかわらず第一乙種合格

昭和十九年一月 満州独立守備隊一三八部隊(奉天)入隊

九月 咯血し海城陸軍病院に入院、その後病院を転々
チャムス陸軍病院を退院し富錦の原隊に復帰

昭和二十年五月 延吉挺身斬込隊に転属

八月九日 開戦

八月中旬 延吉山中にて武装解除

十月中旬 延吉より十日間の徒步行軍で入

ソ、さらに貨車でムリーに着く。

ムリーでの仕事は、鉄道工事を
初め大工、左官、農耕、伐採等
多種にわたる。途中病氣療養の
ためオカ収容所へ

昭和二十三年四月

ホルモリン二一七収容所へ

以後、引揚げまでここで生活

昭和二十四年十一月

ナホトカより舞鶴へ復員

飢え、極寒、重労働のシベリアの生活は、およそ人間が生き延びるのには程遠いところであった。そのようなどころで、上羽淳一郎氏が咯血の病身でありながら生還できたことは、不思議な気がする。恐らく彼の身体の内には不屈の精神力が秘められているに違いない。

さらに「己を知る」というのだろうか、シベリアではくよくよしないことに気をつけたと御本人が言っているように、運命に逆らわなかったことがよかったのだろう。

(熊本県 高瀬 潤吉)

二二七収容所の点描

熊本県 家人 壯介

すき間風に起こされた第一夜

昭和二十年十二月四日、急にトラックがとまった。

「ダワイ、ダワイ」とソ連のカンボーイの声に促されて、ほろを押しのけてトラックから降りる。外は薄暗く、周囲は簡単な木さくに囲まれている。隅には望楼があり、銃を持った警備兵が見下ろしている。いよいよ捕虜収容所に入れられたという実感を持った。寒さと疲れのため、指示された二番目の丸太小屋に入り、寝る場所を決めると、着のみのまま背のうを枕にごろりと横になった。ここが我々が住むことになる二二七収容所であると、後でわかった。

翌朝、丸太の壁のすき間から吹き込む、雪まじりのすき間風に起こされた。顔から肩にかけて痛いような寒さを感じ、ここはどこだろうかと辺りを眺めようと